

平成二五年度 日本仏教学会発表レジュメ

発表テーマ…「決定深信」考 ―教えの展開と実践―

佛教大学 藤本浄彦

キーワード…深心積、決定深信、信機信法(二種深信)

周知のように、浄土經典の『観無量寿経』では十六観法の第十四で上品上生において、「若有衆生願生彼国者発三種心即便往生。何等為三。一者至誠心二者深心三者廻向発願心。具三心者必生彼国」(浄全巻一・四六)と説示される。「三心を具うれば、必ず彼の国に生まるとされる。

善導は、『観経疏』散善義で『観経』説示の「三心」の中の深心について、他の中国浄土教家とは異なる深心解釈をする。すなわち、深心を「深く信ずるの心」と規定し、さらに「決定して深く信ずる」ことを畳み掛けるがごとく四度用いて強調する。その中でも特に「有二種。一者決定深信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常没常流轉無有出離之縁。二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願撰受衆生無疑慮乘彼願力定得往生」(浄全巻二・五六)とする視点が注目されなければならない。

それは、二種深信または信機信法として特徴づけられ、法然を初めとする日本浄土教において特に重視される。まさに「仏と衆生との関係」が信仰として、すなわち、「決定して深く信じる」ことよって具体的に、信仰構造論的に語り出されていると言うべきである。

法然は、『往生大要抄』で決定深信の具体的動態を信機と信法の構造として「はじめには我が身のほどを信じ、のちには仏の願を信ずる也」(昭新法全・五八)と受領する。そして、『十二問答』では「生死を離れずらんと思いかためて、若し手はふさがらば数をとらずとも、命終わらんまで、口に常に唱えるを深心と云うなり」(昭新法全・六四二)と口称念仏実践のレベルで論じる。

法然は『醍醐本 三心料簡及御法語』で「一弥陀本願決定、二釈迦所説決定、三諸仏証誠決定、四善導教積決定、五は我等信心決定、此義を以て故に往生決定也」(昭新法全・四五二)と言う。つまり、弥陀・釈迦・諸仏そして善導における決定のことに於いて「我等が信心決定なり」とし、それゆえに「往生決定也」とする。

これらの観点から「決定深信」を考察することを通して、浄土宗の教行(所求〈往生浄土・所帰〈阿弥陀仏〉・去行〈口称念仏〉)に関与する信仰構造論が試みられると考える。

本発表では、①善導『観経疏』深心積の「決定深信」の用法を指摘し、②他の中国浄土教者の『観経』注解にみられる深心積を点描し、③法然における善導の「決定深信」受領と実践を取り上げ、④浄土宗の教行として「決定深信」論を私考したい。

以上